Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-16

郷土史の裾野を広げるために ： 朝来市との連携事業をふりかえって(活動報告)

添田, 仁

(Citation)
Link ： 地域・大学・文化 ： 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,5:167-171

(Issue Date)
2013-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005414

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005414

て言えば、単に自然災害一般として捉えるのではなく、「戦時下に起こった」という時代に即して考える必要があるでしょう。

今回は、神戸市文書館が所蔵する阪神大水害関係の公文書を展示に利用できたことが、内容の充実化につながりました。こうした成果を広く共有するため、これからも地域史料の収集・整理・保存・公開・活用をいっそう進めていくよう、神戸市文書館と協力していきたいと考えています。

郷土史の裾野を広げるために
――朝来市との連携事業をふりかえって――

添田　仁

はじめに

兵庫県朝来市生野町。かつて生野銀山の鉱山町として栄えたこの町も、昭和四八年（一九七三）の閉山で基幹的産業を失って以降、慢性的な雇用不足と人口流出に悩まされてきた。現在では、史跡・生野銀山を中心として山間の静かな観光地である。

生野町と神戸大学文学部地域連携センター（当時）は、平成一六年（二〇〇四）から、地域の古文書を活用したまちづくりの方法の開発にかかわる共同研究をスタートさせた。これに先立つかたちで、生野町と神戸大学工学部建築史研究室は、生野鉱山をはじめとする近代化遺産についての共同研究を、平成一三年（二〇〇一）に始めている。平成一六年一一月からは、神戸大学で文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」事業が始まり、生野町は、地元の住民と大学生が協力して、地域歴史遺産の保全・活用について考える実践フィールドともなった。そして、平成一七年（二〇〇五）三月には、それまでの活動の成果を発展させ、学術研究・教育の分野で全面的な協力関係を築くために、生野町と神戸大学は「連携協力に関する協定」を結んだ。これは、同年四月に生野町が和田山町・朝来町・山東町と合併して朝来市となってからも朝来市との間で引き継がれ、現在に至っている。

本稿では、これまでの朝来市との連携事業をふりかえりながら、地域歴史遺産を取り巻く現状と課題について考えたい。

一　郷土史をめぐる課題

まず、共同研究がスタートした当時の生野における郷土史をめぐる状況と課題について確認しておきたい。

生野といえば、江戸時代に生野銀山を管轄した生野陣屋が置かれたことや、幕末に尊攘派の志士がその陣屋を急襲・占拠した「生野義挙」が勃発した地として全国的にも知られている。その一方で、早くから澤宣一・望月茂『生野義挙と其同志』や柏村儀作校補『生野史』といった郷土誌の刊行が盛んであり、郷土史研究の面で分厚い歴史を有する町でもある。戦後に〈生野町史談会〉が設立され、その流れを汲む〈生野銀山史談会〉も活動している。同会は、年報『一里塚』を発行して積極的な郷土史の掘り起こしを進めるとともに、観光客の歴史ガイドを務めるなど、生野の歴史文化にかかわって長年不可

欠な役割を果たしてきた。しかし、地元の歴史に興味を持つ一般の住民の方ともお話しするなかで、郷土史と〈生野銀山史談会〉をめぐって、課題が少しずつ浮かび上がってきた。

第一に、一般の住民について、歴史に興味はあっても、生野の郷土史についてはほとんど知らない方が多かったこと。先にあげた『生野史』などは、文章の大半を史料の引用が占め、現代語訳や補足説明も乏しいことから「専門的すぎる」「読みにくい」と酷評、敬遠されていた[1]。また、直接古文書に触れたことがない方も多かった。平成一六年一二月に開催した古文書講座「江戸時代の古文書に触れてみよう」や、同一七年一〇月に生野書院で開催した特別展示「もうひとつの生野〜江戸時代の生野をたずねて〜」では、普段ガラスケースや蔵に収められている古文書や絵図を間近で適宜さわりながら観覧してもらったところ、大変よい反応をいただいた。

第二に、同じく一般の住民について、郷土史について調べること自体を敬遠（遠慮）する節があったこと。たとえば、ある住民は「生野町では、町民の方々が毎月一回、独自に古文書学習会を開催している。学習会は、長年継続して行われており、参加者の古文書読解のレベルもかなり高い。そうした参加者のレベルを反映して、テキストも非常に難易度の高いものが用いられているが、これから古文書を学ぼうとする初心者には難解すぎるため、参加してもついていけなくなり、参加を断念する場合が多い[2]」と述べている。この「学習会」とは、先の〈生野銀山史談会〉のことである。「古文書を読みたくても読めない人」にとって、〈生野銀山史談会〉の高度な古文書の読解能力は、郷土史への入口を塞ぐ高い壁になっていたのである。そして、ほかに一般の方が郷土史にアクセスする回路はなく、生野の郷土史研究は、（あくまで結果的に、ではあるが）一部の郷土史家の「専売特許」になってしまっていた。

第三に、〈生野銀山史談会〉について、メンバーの高齢化が進み、同会自体が組織の存続に不安を感じていたこと。郷土史の担い手として、新たな層を獲得する必要に迫られていた。

以上のような課題をふまえて、朝来市との連携事業は、地域のみんなに郷土史を身近に感じてもらい、誰でも郷土史を語り継いでいける環境を整えることを通して、郷土史の裾野を少しずつ広げていくことを目標にした。

二　郷土史の裾野を広げる試み

（一）〈生野古文書初級教室〉と「あさごの歴史と古文書講座」

郷土史を語り継ぐ担い手を増やすために、地元にのこる古文書を解読する勉強会を新たに組織した。平成一八年（二〇〇六）一〜三月にかけて初心者向けの古文書講座（講師は河野未央氏が担当）を実施し、その講座の受講者が中心となって、同年四月に〈生野古文書初級教室〉が立ち上がった。現在は〈生野古文書教室〉と名前を変え、ほぼ毎月二回のペースで地元の古文書を素材にした勉強会を続けている。同会メンバーの古文書読解能力の成長はめざましく、平成二五年（二〇一三）三月には、上生野村「御仕置五人組帳」（生野書院所蔵）の翻刻・読み下し・現代語訳をまとめた生野古文書教室編『解読 御仕置五人組帳』を発刊した。もともとくずし字も読めなかった住民が、自分たちの手で郷土史の一端を明らかにし、それを地域の方々に向けて発信するまでに至ったことを素直に喜びたい。

次に、〈生野古文書教室〉の活動が安定した段階で、さらにそ

初級者向け古文書勉強会（2006年2月）

の裾野を広げていく取り組みも進めた。とりわけ、住民のなかに〈生野古文書初級教室〉のように古文書を初級から学びたいという声が多かったことから、平成二二年度から二四年度までの三年間、「あさごの歴史と古文書講座」を年四回のペースで開設した。内容は、（1）朝来市域の古代から近代までを住民にわかりやすく伝える歴史講座、（2）初心者向けの古文書講座、さらに（3）自宅にお持ちの古文書についてのカウンセリング、という三部構成である。会場は可能な限り合併前の旧四町に振り分け、毎回四〇名程度参加者を得た。この講座を経て〈生野古文書教室〉の活動に参加するようになった住民もいる。今後、第二・第三の〈生野古文書初級教室〉の立ち上げも検討したい。

（二）生野書院所蔵文書の整理と公開

史料を安全な環境のもとで保管し、後世に伝えていく取り組みも進めてきた。最初に、生野書院所蔵文書の保存・管理体制の整備に取り組んだ。なぜなら、それまで同文書については、酸性紙の袋に入れられ、一部の詳しい者だけが比較的自由に持ち出すことができるなど、文書保存・管理の観点から見て好ましくない点が多く見られたからである。まずは、すべての古文書を中性紙の封筒や箱に移し替えて保存の環境を整えた。平成一六年には、一般の方でも閲覧しやすいように、史料一点ごとの内容説明を充実させた目録を作成した。また、平成二四年には、江戸時代に郷宿を務めた吉川家の古文書を再整理し、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『吉川家文書目録』を刊行した。朝来市域で史料目録が刊行されたのは、これが最初である。平成一六年には、〈生野古文書初級教室〉（当時）のメンバーが中心になって、生野書院内で古文書の画像データを公開している。結果、閲覧による現物の劣化を食い止めるとともに、一般の方でも手軽に古文書を見られる環境を整えることができた。

このような措置に対して一部の住民から反発もあった。それは、大学主導で行われた古文書の管理強化によって、住民が地元の古文書を自由に閲覧する権利を奪われたという趣旨の抗議であった。しかし、私たちが進めた整備は、それまで一部の人によって管理・活用されていた古文書を、より安全で透明性の高い方法で守り、同時に誰でもアクセスできる回路を設けることを目的にしたものであり、住民全体の利益を鑑みれば良策であったと考えている。

ただ、古文書の保存・管理体制の整備を進めていく上で、うまくいかないことも多かった。とりわけ、住民自身の手で古文書を整理して目録を作成し、公開に向けた環境を整えることの意義については、なかなか理解してもらえなかった。公的な価値を付与され、管理者・取扱担当者も限定されている指定文化財とは異なり、地域歴史遺産の価値は、それを取り巻く所蔵者、行政の文化財担当者、研究者、郷土史家、一般の住民、それぞれのスタンスに応じて相対的かつ流動的であり、地域社会のなかで認識が共有されているわけではない。それゆえに、地域歴史遺産を保全し、後世に伝えていくことについての意義や責任の所在も曖昧になり、それらの多くが行き場を失っているのが実状である。生野の場合も、住民は古文書を読むことはしても、古文書を整理・保存することについては、専門研究者や行政の「仕事」という認識を持っていたように思う。

（三）住民自身による古文書の整理と保存

地域歴史遺産を守っていくべき主体は誰かと問われれば、それは、所蔵者、行政の文化財担当者、郷土史家、一般の住民の別なく、地元の住民全員と考える。朝来市との連携事業では、宙に浮いてしまった地域歴史遺産を少しでも多く守り、後世に伝えていくための土台作りにも着手した。

まず、市内外を問わず、朝来市域にかかわる

古文書の調査・蒐集と整理を行った。これまでに、吉川増太郎文書、石川家文書、太田虎一旧蔵文書、佐藤家文書（以上、旧生野町）、枚田家文書（旧和田山町）、山田家文書（福崎町）、寺田家文書（香美町）、石川準吉関係資料（東京都）等について、調査・整理し、写真撮影と目録の作成を行った（一部は作成中）。とくに、石川家文書と石川準吉関係資料については、別途三菱財団からの助成を受け整理を進めている。

また、蒐集した古文書を用いて、地元の住民に地域歴史遺産の重要性と、それらを守り伝えていくための方法について学んでもらう機会を設けた。とくに、石川家文書については、平成二一年（二〇〇九）二月に、シンポジウム「生野の歴史再発見――森垣村石川家と生野銀山――」を開催した。構成は、（1）石川家文書の整理過程で明らかになった史実を還元することを目的とした講演会（森田竜雄「肖像・墓碑銘・過去帳からみた石川家」）、（2）大学生と住民が一緒に行う石川家文書の整理体験、（3）石川家文書の所蔵者が、大学生や近隣住民に向かって、古文書を所蔵する者の経験や思いを伝える座談会の三本立てであった。また、平成二三年二月には、これに加えて、古文書の裏打ち体験ワークショップ（講師は工房レスト ア・平田正和氏が担当）、特別展示「再発見 銀山の遺産――森垣村石川家に受け継がれてきたもの――」[3]も開催した。今年度からは、奥銀谷自治協議会のメンバーが中心になり、比較的判読しやすい近代文書の整理を進めるという新しい企画も始まっている。これらの企画を通して、地元の住民が地域歴史遺産に対する認識を共有し、それらを保存し、後世に伝えていくことに対する理解が深まっていくようになればと思う。

所蔵者を囲む座談会（2009年3月）

（四）地域から学ぶ

朝来市との連携事業の特徴は、冒頭で述べたように、文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」事業、ならびに平成一八年度～二四年度の「地域歴史遺産活用企画演習」として、地域社会のなかで住民と一緒に地域歴史遺産の保全・活用をコーディネートできる人材の育成フィールドに位置付けられたことである。朝来市は、大学生・大学院生が授業で学んできた理論や知識を試し、地域歴史遺産の保全と活用をめぐる地域の実状と、実践的な方法論について学ぶ場ともなった。

とくに、学芸員や教員を目指す学生が中心になって、地域住民の生の声を聴きながら地域歴史遺産の保全と活用に従事した。歴史講演会や展示会では、歴史研究の成果を地域にアウトリーチする方法を追究し、アカデミズムとしての歴史研究の意義だけではなく、地域住民にとっての地域史研究の意義を学んだ。現地のガイドによるフィールドワークでは、郷土史の持つ歴史と奥深さを体感した。古文書整理では、整理が済んで整えられた古文書ではなく、蔵出しされたばかりの古文書を整理し、歴史資料として目の前に用意されるまでの苦労を体験した。古文書所蔵者を囲んでの座談会では、古文書を守り伝えていく上での苦悩、自宅の古文書

市民との古文書整理（2009年3月）

を歴史資料として使用される側の思いに直接触れた。学生にとって、これらは大学のなかにいては知ることのできない、貴重な経験となったはずである。

将来的に、学芸員や教員の職務として地域の歴史文化にかかわる人はもちろん、職務ではなくても一住民として活動に参加する人、もしくは活動には積極的に参加しなくても、活動に対して肯定的に理解して応援してくれる人が、一人でも多く育つことを期待したい。

おわりに

豊かな歴史文化を有する地域とは、単に往時のノスタルジックな風景や、歴史研究者が意義を付与した史料のみを断片的に切り取り、そこから得られた歴史像が一方的に復元・発信されている場の集合体ではない。歴史研究者も含めて、実際にその地域に住んでいる人びとが対話を繰り返しながら、自分たちの住む地域の文化遺産を自らの手で守り、掘り起し、その成果を自らの感性で発信するという、生きた歴史文化が充満した場の集合体である。

しかし、その核となるべき地域歴史遺産の未来は安泰とは言えない。過疎化と高齢化が進む地域で、文化財行政に宛てることができる財源・場所は限られている。また、かつて地域の歴史文化をリードした郷土史は後継者不足に悩み、全体として力を失いつつある[4]。そして所蔵者は、先人がのこした地域歴史遺産を守り続けることに多大な労力を費やし、疲弊している。地域社会のなかで生み出され、のこされてきた地域歴史遺産の性格を考えれば、本来的には地域社会が持つべき責任が所蔵者個人に押し付けられている状態と言えなくもない。

地域の歴史文化を一部の住民だけが背負う時代は、もう終わったのではないか。では、地域歴史遺産を行政や所蔵者に押し付けるのではなく、地域歴史遺産をめぐる課題を地域社会にくらす住民一人一人が自分たちの課題としてとらえ、地域全体で解決することに理解と協力を惜しまない社会を取り戻すために必要なことは何か。依然、答えは出ていない。

註

（1）この叙述の方法こそが、生野の郷土史家が戦前・戦中の郷土史を自省し、真実性を追求した結果の貴重な成果である。添田仁「戦後郷土史のなかの地域歴史遺産――生野町史談会の挑戦――」（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』、岩田書院、二〇一三年）を参照。

（2）河野未央「朝来市生野町との連携事業」（『平成一七年度事業報告書 歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業（4）』、二〇〇六年）、七三頁。

（3）朝来市・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター（添田仁・橋本寛子）『図録 再発見 銀山の遺産――森垣村石川家に受け継がれてきたもの――』（二〇一一年）。

（4）飯澤文夫「郷土史団体の現在」（前掲『「地域歴史遺産」の可能性』所収）。